



2021年(令和3年)  
9月号(No. 916)

公益社団法人  
**日本山岳会**  
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>  
e-mail ● [jac-room@jac.or.jp](mailto:jac-room@jac.or.jp)

## 101年目の石狩川、石狩沢、石狩岳 再び大島亮吉の足跡をたどって

北海道支部 田中 健

本会報昨年11月号で、大島亮吉の足跡をたどる「100年目のクワンナイ川遡行」を掲載したが、その山行記の第2弾。ポピュラーなルートがメインだった昨年と違い、今年のルートは近年あまり人が入っていない箇所が多く、ハイマツこぎなどでかなり難儀したが、なんとかほぼ予定どおりにトレースできたという。

大島亮吉が名紀行「石狩岳より石狩川に沿って」にその様子を書いた山旅の100周年を記念し、その前半部分の足跡をたどる山行を行なったのが昨年7月のこと。それから1年、今夏は昨年の行程に続く石狩連峰の部分をたどる支部山行を実施した。

### 旧・石狩沢を遡って

7月31日、私たち4人(うち3人

が昨年と同メンバー)は、昨年の山行終了地点であるヌタブヤンベツ川と石狩川本流の合流点付近を朝5時過ぎにスタートした。天気は上々、暑くなりそう。今回私たちが歩くのは、石狩川から石狩岳、音更山を越えて由仁石狩川に降りる、大島たちが大正9(1920)年7月25日から26日にかけてたどった行程。幕営地も同じ場所を考えていた。しかし、

### 目次

|                                           |    |
|-------------------------------------------|----|
| 101年目の石狩川、石狩沢、石狩岳<br>再び大島亮吉の足跡をたどって……     | 1  |
| 第5回「山の日」記念全国大会を<br>別府市・九重町・竹田市で開催……       | 4  |
| 地域発「山の日」レポート②北海道支部…                       | 6  |
| 高頭仁兵衛翁寿像修復竣工と第64回高頭祭<br>～高頭の行動力と実績について～…… | 7  |
| 全国山岳古道調査プロジェクト報告①…                        | 8  |
| 連載 島の山旅への誘い⑨……                            | 9  |
| 東西南北……                                    | 12 |
| 支部だより……                                   | 13 |
| 北九州支部／宮崎支部<br>新入会員……                      | 14 |
| 図書紹介……                                    | 15 |
| 会務報告……                                    | 18 |
| ルーム日誌……                                   | 18 |
| 会員異動……                                    | 18 |
| INFORMATION……                             | 18 |
| 編集後記……                                    | 19 |

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間  
★新型コロナウイルス感染防止対応のため、当分の間、取扱時間を短縮します。平日13時～20時

そのルートについては謎も多い。まず彼らは石狩川本流から「石狩沢」を遡って石狩岳へ向かっているが、この「石狩沢」がどの沢を指すのか？ が最初の疑問。普通に考えれば、現在「石狩沢」と呼ばれる地形図にもそう表記される石狩岳への直登沢のことだろう、となるが、実はそうではない。というのも、大島はこう書いているからである。

《アイヌと別れて合流点より左岸の林中を下流に沿って少時降ると対岸に小さな沢の再び合流するに遭った。これが石狩沢である。》

「石狩沢」の合流は、ヌタブヤンベツ川の合流点よりも石狩川本流を下流に行った所にあると言うのだ。しかし、現在の「石狩沢」の合流は、

ヌタブヤンベツ川の合流点よりも上流。不思議に思って大島が山行に持参した「山岳」12年附図や昭和初期のガイドブックを見ると、当時は現在の「石狩沢」は「大石狩沢」と呼ばれ、今は無名の短い沢が「石狩沢」だったことが分かる。沢の名前が変わってしまったのだ。

《石狩沢と言ってもそれは決して顕著な沢ではなく本流に沿って来てもうっかりしていれば見出し難い程のものである。沢は両側に繁茂する針葉樹に蔽われて水面などは薄暗く、朝霧に濡れそぼれたイタダリの群生を分けて登るのは極めて無気味だ。》

今も「旧・石狩沢」の合流は見落とすようなほどの細流で、2016年の台風被害の影響か、その位



旧・石狩沢の出合を探して石狩川本流を行く

置は地形図よりも1000mほど上流寄りになっている。沢はヤブと木々に覆われ、水量は少なく、倒木も多くてすつきりしない。途中で沢がほぼ直角に左折して東を向くと、正面から陽が当たり、背後には残雪のトムラウシ山が大きく見える。1400m手前で早くも水流は涸れる。

## ハイマツの海をいいで

《急斜面をナナカマド、ミヤマハンノキなどの密生を分け、それらの樹枝を手頼りに漸く這い登って前石狩岳に連なる山稜の一点に達したのは九時三十分で、石狩川畔よりは

約三時間を要している。》

私たちが鹿道を頼りに1710m峰近くの石狩岳北西尾根に上がったのは10時過ぎ。石狩川畔から5時間近くかかっている。前石狩岳というのは、北西尾根上の1824m峰のことだろう。ここからは尾根上を行くが、東側の斜面は木が少なく灌木や笹のヤブも薄いので、こちら側を絡んで行く。沢を挟んで音更山が大きくそびえ、右手に石狩岳も見え隠れする。やがて北西尾根と石狩岳の全貌がはつきり見えてくる。ここからの石狩岳は、どこから見るとも立派だ。右下に目を向けると、「現・石狩沢」の細い雪渓が一直線に小石狩岳へ突き上げている。1824m峰への登りにかかる、猛烈なハイマツこぎが待っていた。

《山稜にはナナカマド、ミヤマハンノキの密生する間に偃松<sup>ま</sup>のひねくれた樹枝が思うさまにのさばりかえっていてその通過の困難は容赦のない日光の直射を加えていや増し、非常な疲労とたえがたい喉の渇きに身体はへとへとになっ

てしまった。》  
ハイマツの枝上を渡って行こう

にも、バランスを崩して枝の隙間に落ちてしまう。薄そうな所を狙って右へ右へと1824m峰を巻いて石狩岳とのコルを目指すが、すぐ目の前に見えるのに全然近付かない。

《漸く偃松を泳ぎ越し、それから解放せられると又草いきれのする暑く熱った草地を過ぎり絶えず山稜を伝って漸く十二時意外な時間を費やして前石狩岳と石狩岳の鞍部に》  
私たちが達したのは15時30分。稜線に出てからすでに5時間半。

《前面に深く暗い谷を隔ててユ一ニ石狩岳がその端麗な山容を眼近く聳えさせ、山頂の三角櫓さえも明らかに指示することが出来る。》という文章も一見謎だ。私たちの目の前にそびえているのはユニ石狩岳ではなく、先ほどと同じ音更山だからだ。これも、当時とは山名が変わってしまったことが原因。かつては音更山とユニ石狩岳の名前が逆だったのだ。つまり、大島が「ユ一ニ石狩岳」と書くのは今の音更山のこと。三角点測量用の櫓があったのもその証拠である。音更山には三角点があるが、ユニ石狩岳にはない。



石狩岳へ向かって北西尾根を登る。まだヤブは薄い

## 夕闇迫る石狩岳の頂に立つ

この先の稜線は格段に楽になる。右の斜面にハイマツのない裸地が点在し、傾斜は急だが、そこをつないで登っていけばいい。ハイマツ自体も膝程度。今度は山頂が確実に近付いてくる。

《幾つも幾つも岩稜の小突起を越えてゆき、遂にその最高点と思われる岩稜の隆起に達したのは正二時であった。》

私たちが石狩岳山頂に着いたのは16時50分。夕闇が迫り、雲も湧いてきたが、なんとか周囲の山々は同定できる。《オトプケの流域は鬱々として蔽うた暗緑の深林の

うちを黒い細条をなして牢獄のような暗い峡谷が深く穿ち流れている。」と大島が書いた音更川の流れも確認できるが、いささかも恐ろしげに見えないのは、流域の針葉樹林が失われたからだろうか。

《最高点より更に岩稜の隆起を進めば(中略)岩稜は長大な山稜を丁字形に相会している。右は即ちニペソツ山脈に連り、左はユーニ石狩岳に導くものであり》

この文章はとりわけ不可解だ。右へ行けばニペソツ山、左へ行けば音更山という具合に稜線が分岐するジャンクションは、まさに私たちが今いる石狩岳の山頂なのだ



ガスと小雨の中、秋葉沢を下る

から。事実誤認か記憶違いとしか思えない。もはや17時過ぎ。音更山を越えて幕営予定地まで行くことはあきらめ、音更山への稜線の縦走路の途中、シュナイダー・コースの分岐近くにテントを張る。

### 音更山を越えて由仁石狩川へ

8月1日は早朝から濃霧に包まれ、視界数十m。雨も少し降り出す。朝食抜きで5時過ぎに出発し、約1時間で音更山山頂。眺望ゼロ。大島は、ここから「ユーニシカリに降る」としか書いていないが、いろいろ考え合わせると、由仁石狩川の本流ではなく、現在の地形図に「秋葉沢」と表記される支流を下ったのだろう。

《ユーニ石狩岳の山頂より中腹にかけては花崗岩の岩崩れがこれを被覆して、足場の悪い急峻な下りを急ぐので膝頭が痛い。》

私たちが大きな岩の積み重なった岩礫帯を下っていく。所々ハイマツ帯につかまるが、下りなので昨日より全然楽だ。1670m付近で秋葉沢に降り立つ。大島たちが残雪の下から滴る水を飲んだのとたぶん同じあたり、1550m

付近で私たちがもほぼ1日ぶりに水流を見出し、朝食を作って食べた。右岸から支流が滝となつて合流する1380mあたりが、私たちも昨日泊まる予定だった大島たちの野営地点かと思われるが、幕営適地は見当たらない。

大島たちはここに泊まった翌朝、明るく開けた場所に出て衝撃的な光景を目にする。

《自分たち一同はただ悚然としてしまった。曠々とした川床の全部を蔽い尽して尚遠い両側の傾斜地までそこには打倒れた巨木が累々と折れ重なり、相横たわり半ば倒れかかって相互によりかかりつつ刺々しい樹枝を空しげに突き立てている。それが前方にまですつと続いている。何んと言う痛ましい凄然たる光景であらう。》

私たちが下る沢も、谷幅が一気に広がって荒れた溪相にはなるがかつて、そんな凄絶な光景が広がっていたことは想像すらできない。やがて大島たちは《暗い巨樹の鬱々たる大森林の深い静けさのうちに吸い込まれる様に這い込んでいった。水脈とは何時しか風倒木

を越えているうちに離れてしまった。》

私たちも笹の中の鹿道をたどるうちに水脈と離れてしまいが、針葉樹の大森林は今やどこにもなく、悲しいかな、その痕跡さえ見当たらない。ただ、幅広い谷の中を川が伏流と合流、分流を繰り返して流れているところだけは、100年前と変わらないようだった。

標高1050m付近で一気に開けると、由仁石狩川本流との合流点だった。《右手よりひとつの大きな沢を合流させた流れは漸く純正のユーニシカリの溪流を形成して来た。》と大島が書いた所である。ここから私たちは、2011年以来通行止めになっている由仁石狩川林道を、数ヶ所の大きな崩壊箇所や真つ二つに折れた橋などを越えて歩き、15時30分、国道273号に面した林道入り口に置いた車にたどり着いた。

ここから大島たちは、ほぼ石狩川沿いに現在の上川町市街まで歩いているが、今は国道が通り、ダムができていて、あまり踏査価値はないかもしれない。だが、一番の難所だった「大函」などは、改めてトレースしてみたいものである。



## REPORT

# 第5回「山の日」記念全国大会を 別府市・九重町・竹田市で開催

東九州支部 加藤英彦

8月10・11日、第5回「山の日」記念全国大会が、九州では初めて大分県にて開催された。この大会は昨年8月に開催の予定であったが、東京オリンピック同様、新型コロナウイルス対策のため1年延期され、規模を縮小し万全のコロナ対策を講じて開催にこぎ着けた。大分県では、「山の日」が誕生する前、平成25年10月11日に「くじゅうタウンミーティング」が行なわれ、平成27年8月11日には、「山の日制定記念in大分くじゅう」というプレイベントも開催された。九州の中でも、くじゅう連山や祖母・傾山群を抱え、その地の利をもつて行政や関係者たちが、山の日の一連の行事を積極的に誘致し、PRに努めてきた経緯がある。今回のテーマは「山に遊び 恵みをいただくくおんせん県おいたの山と人の絆を未来へ」というものであった。

## 前夜、別府市でレセプション

8月10日17時30分から別府市ビィコンプラザで、招待者120名の参加の下、以下のプログラムが行なわれた。開宴の言葉（実行委員会顧問・衆議院議員衛藤征士郎氏）、主催者挨拶（実行委員会会長・広瀬勝貞大分県知事）、歓迎の言葉（同副会長・長野恭紘別府市長）、乾杯（同副会長・日野康志九重町長）、アトラクションのミニコンサート、次期開催県挨拶（吉村美栄子山形県知事）、閉宴の言葉（御手洗吉生大分県議会議長）。

本来であれば華やかなレセプションとなるはずであったが、コロナ対策のため飲食を伴わず質素にして静かに進められ、わずか1時間ばかりでお開きになった。静かに聞くヴァイオリンの音による「坊ヶつる讃歌」は心に残った。

## 記念式典は九重町で

記念式典は8月11日午前9時から、大分県九重町の九重文化センターで開かれた。コロナ対策とし



記念式典は歓迎の舞「浦安の舞」から始まった

てメイン会場とサブ会場（抽選券当選者250名）の2つに分け、席は両隣を空席に定員の半分として行なわれた。事前に配られた体調管理チェックシートや受付カードを提出、手指の消毒、マスクの着用等により万全の対策が講じられた（参加者は約520名）。

チームタデ原くじゅうタイ子を守る会の小学生が、設置された鐘を鳴らす「山鐘」に始まり、開会宣言では衛藤衆議院議員が、これまでの経緯や山に感謝する日であることを説明。国歌斉唱も黙唱にて行なわれた。主催者挨拶として広瀬大分県知事が、コロナに影響されたこれまでのいきさつを説明、大



チームタデ原くじゅうタイ子を守る会の子らによる「山鐘」

分県の豊かなところを強調し、「山と森について後代につなげていく活動を全国に広げたい」と語った。続いて日野九重町長、土居昌弘竹田市長からの歓迎挨拶、環境大臣代理としての岡本光之九州地方環境事務所長、林野庁長官代理の小島孝文九州森林管理局長による来賓挨拶が行なわれた。

続くメイン・アトラクションの第1部は、大分の山の映像が流され、第2部は「おおいいたの人く大分の山を守る活動報告」として、チームタデ原くじゅうタイ子を守る会のキッズガイド、九重の自然を守る会による自然観察会、久住高原みちくさ案内人倶楽部による野焼き



くじゅう連山の山小屋を模した舞台でのトーク・イベント

の活動、大分県立玖珠美山高校の登山道整備などが報告され、戸高雅史氏（登山家）によるビデオ・メッセージも紹介された。第3部のおおいた「未来への讃歌」では、過去大会の振り返りのビデオを紹介した後、芹洋子さんが2021「山の日」合唱団・九重の有志とともに、トークを挟みながら「坊ヶつる讃歌」「山はふるさと」「ふるさと」の3曲の合唱・黙唱を行なった。

最後のリレー・セレモニーでは、広瀬大分県知事から山形県の吉村知事、山形市長、上山市長らへ「山の日帽」が引き継がれ、手塚友恵大会運営委員長の「来年山形で、心でつながりましょう」との閉会の言葉に続き、竹田市立久住小学校の生徒による「山鐘」で締めくくられた。

続く記念行事のトーク・イベントは、大分県出身の俳優、石丸謙

二郎氏の司会の下、くじゅう連山の山小屋を模した「ヒュッテ石丸」に3人のゲストが訪問するという設定で、三浦豪太氏（プロスキーヤー）、工藤夕貴氏（女優）、南谷真鈴氏（冒険家）らによる、大分の山の魅力や山からの恵み、人の絆などについてのフリートークが行なわれた。「くじゅう連山はヒマラヤに似て心に響く景色が広がっている」「登りやすい山が多

く癒される温泉も豊富。何度も訪れてみたくなる」といった、来場者にも共感するところのある語りがあった。今回の式典の目玉であったトークが盛り上がりつつ終了となった。

## その他の行事

歓迎フェスティバルも11日の10時〜16時30分、九重長者原園地で開催された。特設ステージを設け、地元の神楽演奏や、お笑い芸人トクシヨウ、音楽ライブ、木工のワークショップ、合唱などがあった。しかし、午後から降り出したあいにくの雨のため客足は少なめであった（延べ1500人くらいに参加）。一般募集のエクスカージョン（体験登山会）も参加者は少なく、1コースのみ行なわれた（参加者15名）。法華院温泉に1泊したが、翌日も同じく雨のためコースを変更して長者原に下山後、解散となった。今回の開催は2年ぶりであり、コロナ禍や直近の台風9号の影響のために、主催者としては、やっと前日に開催を決定するといった状況であった。行政が主体となっていた一連の山の日イベントは、セレモニー化していると言わ

れているが、年一度の行事であり、参加することにも意義があると思っただ。

なお、毎年山の日に計画していた大分県の山岳4団体による登山会は、今年はメイン式典が開催されたために中止とした。東九州支部としては、この日に合わせて記念登山を久住山にて行なったが、あいにくの空模様で11名の参加であった。途中より本降りとなり、山頂を往復したのはわずか4名だけであった。

（写真提供）第5回「山の日」記念全国大会実行委員会

（前東九州支部長）



大分県知事から山形県知事へ「山の日帽」が引き継がれた

## 地域発「山の日」レポート⑫北海道支部

## 山と付き合うために私たちに求められていること

北海道支部 渡辺 悌二

2016年7月の本会報「山」で、山岳団体に所属する私たちがどのように「山の日」と関わっていくべきかについて述べる機会をいただいた。そこでは、次世代へのバトンタッチを進めていくために「山の日」を活用すべきだと書いた。それから5年が経った今、私たちが「山の日」とどのように付き合うべきなのか、また、「山の日」を迎えるに当たって日ごろから何をすべきなのか、もう一度考えてみたい。

## 山との付き合い方に対する考え方の違い

広大な山域をホームグラウンドにしている北海道支部では、必ずしも「山の日」を強く意識しているわけではない。しかし、いくつかの山域で地元自治体や自然保護関連の団体と協力関係がつけられていて、その活動の中には「山の日」のイベントへの参加も含まれている。たとえば、環境省と地元1市9町を中心とした大雪山国立公園

連絡協議会が「山の日」に実施している、登山道補修作業の荷揚げへの参加などである。

こうしたイベントを通して知り得たことに、一定数の若者が山に関わりたいたいと思っているということがある。しかし同時に、これらの若者たちのほとんどが、どのようにしたら山と関わるができるようになるのか、具体的な方法を知らずにいることも分かった。求めている側と求められている側とに、明らかにミスマッチが生じている。

\*

困難な登攀を目指す者から、登山道や野営場の維持管理、生態系の保護・保全に関わる者、健康維持のために山を目指す者まで、どんな理由であつても、若者が山に入る機会を提供することは、私たちに求められている重要な責務であろう。この際、日本山岳会の会員が各地で様々な試みを行なっていて、若者たちの山との関わりが

少しずつ増えてきている。しかし、その増加速度はいまだに極めて遅いと言わざるをえない。

何故、若者の参入がうまく進まないのでしょうか？ 多くの若者は組織に所属することで自由度を失うことを好まない。こうした人々をどう取り込むと良いのでしょうか？ 組織の中で活動してきた私たち高齢者は、若者とのように付き合うべきであろうか？

そのためには、私たちに柔軟性が求められている。豊富な経験と知識が邪魔になることもあるだろう。若者をいきなり組織の会員にさせるのではなく、若者とはSNSなどで緩くつながることで、山への「入り口」に誘うのが良いのかもしれない。

若者の参入がうまくいっているケースも散見される。たとえば、林業界には「林業女子」と呼ばれる女性が入っていて、若年齢層が活躍をしている。ここでもインターネッットを使った情報提供が盛んで、都会に住む女性を主たるターゲットにして、インターネッットなどの駆使によって森や樹木に触れ合える「入り口」を提供している。

\*

北海道は少子高齢化の影響で、社会の維持が日本の中でも最も困難になる地域の一つになると予測されている。北海道の広大な山域と付き合っていくには、若者の山への参入を進める、なお一層の努力が不可欠となる。

日高山脈が国定公園から国立公園に格上げされようとしている。高度な登山技術を持つ人がこれまでに高所の山域の利用を続け、一方で、低所には新たに若者のために雇用場を設けたり、国立公園化によるパートナーシップで若者が様々な活動に参加できる場を増やしたりすると良いであろう。全国の大学生にも働き掛けるが良い。それも山岳部をターゲットにするのではなく、広く多くの学生に声を掛けるべきだろう。こうした様々な活動が、「山の日」を核に進められることが期待される。「山の日」は山と付き合う日ではあるが、将来に向けて「山の日」を意味のある日とするためには、日ごろから若者を中心とした多様な人たちと付き合うことが、私たちが年寄りに求められている。楽しく、緩やかで、柔軟性の高い方法で。

(北海道大学教授・地球環境科学)  
本連載は今月号をもって最終回となります。



## REPORT

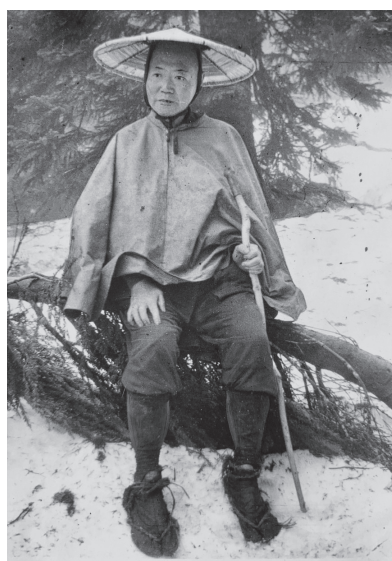
高頭仁兵衛翁寿像修復竣工と第64回高頭祭  
～高頭の行動力と実績について～

越後支部長 桐生恒治

高頭仁兵衛は、越後長岡出身の日本山岳会創立発起人で、第2代会長を務めた。13歳の夏に担任の大平晟（日本山岳会3番目の名誉会員）先生に引率されて弥彦山（634m）に登り、薫陶を受けたと言われる。

越後支部は、1950年に寿像

碑を、登山の原点である弥彦山頂に建立し、その後60年、弥彦神社奥の院増改築のため現在の弥彦大平園地に移設している。寿像建立70周年と移設60周年の節目を迎えた昨年、「写真でみる高頭祭のあゆみ」刊行を契機に、長年厳しい雪



71歳の高頭仁兵衛翁（1947年6月、苗場山にて）

国の自然環境下で寿像碑の経年劣化が著しく認められたため、全面リニューアル修復工事を計画した。昨年12月から寿像修復募金を開始し、支部会員はじめ全国会員や一部支部と関連団体からのご厚志を頂戴した。本紙面を借りて篤く御礼を申し上げたい。

高頭祭は毎年7月25日の恒例開催で、本年度64回目となり、日本の登山祭で上高地ウエストン祭の75回に次ぐ伝統と実績がある。昨年はコロナ禍で縮小開催となったので、今年はコロナ終息を見込み修復竣工式を兼ね盛大に実施する予定だった。ところが、直前の7月12日、東京都に緊急事態宣言が発出され、古野淳会長はじめ一部関係者に参加を見合せていただく状況となった。ただ、新潟市出身で越後支部

会友の坂井広志副会長が実家へ帰省中で、2回のワクチン接種を終了しており参加いただいた。

梅雨明けの快晴の下、14時30分会式宣言、弥彦神社神官から寿像修復竣工のお祓いを受けた。次いで関係者代表の玉串奉納、寿像碑ご献酒セレモニーなどと続き、最後に約50人の参加者で弥彦神社奥の院に向け、安全登山の祈願拝礼を行なった。募金額が155万8000円に達し、目標を上回ったことに謝辞を伝え、寿像碑周辺緑地整備等も追加したことも説明した。本来なら古野会長による「高頭仁兵衛と日本山岳会」を講演予定だったが、中止のため会長メッセージを配布し、了解を得た。

高頭仁兵衛は、日本山岳会創立者7人中唯一地方出身者であり、まだ登山の気風が普及してない明治時代後期に、ウエストンの提唱で小島烏水らと日本山岳会創立に奔走した中心人物だった。当初は会員集めや会の存続も危ぶまれたが、発足時会員390人中の101人を勧誘し、さらに会務財政確立のため1000人分の会費を10年間拠出する約束をし、事実上18年間も負担している。

創立時の山岳会事務所は、東京日本橋にある城数馬の弁護士事務所に間借りするが、大正期になると所在地が安定せず、東京本郷西片町の高頭妹宅や長岡市深沢町の自宅に置いたことも記録されている。登山のかたわら日本初の山岳事典「日本山嶽誌」を発行し、機関紙「山岳」第1号も発行兼編集者名「新潟県三島郡深才村深沢高頭仁兵衛」で発行し、編集作業はもうろん、発行資金を負担するため27年間継続したとされる。

日本山岳会設立時から苦難の時代に、会務財政を維持し組織発展に労力を惜しまなかった貢献度は、最高評価に値すると考える。高頭仁兵衛翁寿像碑を日本山岳会越後支部の継承遺産として、今後も大切に保護管理して行く決意である。

今年度越後支部では、新潟県の某公益財団法人から環境整備助成事業として、「弥彦・国上エリアの持続可能な利用を推進するプロジェクト」が採択されたため、寿像が設置されている大平園地周辺緑地復旧や、弥彦山の登山道整備事業を実施していることも付記しておきたい。

（写真は越後支部資料より）

# 全国山岳古道調査プロジェクト 報告①

近藤雅幸

様々な要望を受け、2025年完成を目標に、日本山岳会創立120周年記念プロジェクトの一環として進められている全国山岳古道調査プロジェクトについて、会報「山」を通じて逐次、会員に進捗状況など情報をお伝えすることにした。ついては、これまでの進み具合を報告させていただきたい。

まず、昨年暮れから多くの会員や支部、同好会からお寄せいただいた推薦古道は230以上に及び、山岳古道に関心を持つ会員の多さに改めてJACの懐の深さを感じた次第である。

さらに4月末には、推薦いただいた古道からプロジェクト・チームで目標の半分を第1次調査対象古道として選択することになった。選ばれた古道については下欄の一覧表をご確認いただきたい。

なお、7月から9月9日まで、実際調査に当たる全国の支部とのZoom会議を行なったが、その中でいろいろなことが分かってきた。それを含めた進捗状況等は次号から適宜、会報で報告していきたい。

## 第1次 調査対象古道

| 現在までの推薦古道                         |                            | 都道府県                |
|-----------------------------------|----------------------------|---------------------|
| 古道                                |                            |                     |
| 1 増毛山道                            |                            | 北海道                 |
| 2 殿様街道                            |                            | 北海道                 |
| 3 恐山をめぐる参拝道                       | 川内口コース                     | 青森県                 |
| 4 蔵王山をめぐる参拝道                      | 蔵王古道・蔵王参拝古道を含む             | 宮城県、山形県             |
| 5 栗駒古道                            |                            | 宮城県、秋田県             |
| 6 二口街道(秋保街道)                      |                            | 宮城県、山形県             |
| 7 秋田街道                            |                            | 岩手県、秋田県             |
| 8 出羽の古道六十里越街道(湯殿山に向かう道)           |                            | 山形県、宮城県             |
| 9 越後米沢街道・十三峠                      |                            | 山形県、新潟県             |
| 10 沼田・会津街道                        |                            | 福島県、群馬県             |
| 11 八十里越                           | 天保古道・間道も枝道として取り上げる         | 福島県、新潟県             |
| 12 六十里越古道                         | 裸山乗越も取り上げる                 | 福島県、新潟県             |
| 13 日光修験の道                         | 三峯五禅頂の道(冬峯の道の一部)を含む        | 栃木県                 |
| 14 大峠(会津中街道)                      |                            | 栃木県                 |
| 15 赤城山をめぐる信仰の道                    |                            | 群馬県                 |
| 16 榛名山をめぐる信仰の道                    | 吾妻ルート：植栗を含む                | 群馬県                 |
| 17 上州から越後への道                      | 三国峠、三坂峠                    | 群馬県、新潟県             |
| 18 十文字峠越え                         |                            | 埼玉県、長野県             |
| 19 秩父往還(熊谷から雁坂峠越えで川浦口留番所跡へ)       |                            | 埼玉県、山梨県             |
| 20 日原秩父往還と富士信仰の道                  |                            | 埼玉県、東京都             |
| 21 鹿野山道                           | 嶺岡往還を含む                    | 千葉県                 |
| 22 中甲州道                           | 浅間尾根交易の道も取り上げる             | 東京都、山梨県             |
| 23 大山をめぐる道                        | 八雲修験など三峰を越える行者道を中心に        | 神奈川県                |
| 24 箱根旧街道                          | 静岡県側部分を含む                  | 神奈川県、静岡県            |
| 25 足柄古道                           | 静岡県側部分を含む                  | 神奈川県、静岡県            |
| 26 会津街道のうちの諏訪峠                    |                            | 新潟県                 |
| 27 枝折峠(銀の道)                       |                            | 新潟県                 |
| 28 塩の道・千国街道                       | 3本の道(小谷村部分)                | 新潟県、長野県             |
| 29 立山参詣道                          | 登拝、禅定道及び立山温泉からの道を含む        | 富山県                 |
| 30 信越連帯新道(立山・信越・越信・針ノ木・越中新道)      | 針の木の古道・立山温泉からの道を含む         | 富山県、長野県             |
| 31 有峰への道から薬師岳参拝道                  | うれ往来・唐尾峠も含む                | 富山県、岐阜県             |
| 32 白山をめぐる禅定道                      | 加賀禅定道・越前禅定道・美濃禅定道を含む       | 石川県、福井県、岐阜県         |
| 33 北陸道 木の芽峠越え                     |                            | 福井県、滋賀県             |
| 34 鯖街道                            | 針畑越えを中心に、近江坂、周山街道も取り上げる    | 福井県、滋賀県             |
| 35 金峰山古道(御嶽道)                     | 金峰山をめぐる参詣道                 | 山梨県、長野県             |
| 36 南アルプス北部山岳古道                    |                            | 山梨県、長野県             |
| 37 鳥々谷から徳本峠・中尾峠                   |                            | 長野県                 |
| 38 遠信古道(秋葉街道)                     | 小川路峠を含む                    | 長野県                 |
| 39 伊勢街道                           | 北・西を含む                     | 岐阜県                 |
| 40 富士山をめぐる登山道                     | 須山口登山道・村山古道を含む             | 山梨県、静岡県             |
| 41 飯田街道・伊勢神峠                      |                            | 愛知県                 |
| 42 鈴鹿山脈越えの峠道                      | 根平峠(千種越え、千草越え)・八風峠         | 三重県、滋賀県             |
| 43 比叡山修行道                         | 千日回峰行の道を含む                 | 滋賀県、京都府             |
| 44 葛城修験の道                         |                            | 大阪府、奈良県、和歌山県        |
| 45 吉野に向かう道                        | 旧吉野街道・吉野道(飛鳥から吉野へ越える5峠道)   | 奈良県                 |
| 46 大山道(5本)                        |                            | 鳥取県                 |
| 47 石見銀山の道                         | ①鞆の浦道 ②温泉津沖泊道 ③やなしお道 ④銀山街道 | 鳥根県、広島県、岡山県、鳥取県、兵庫県 |
| 48 因幡街道・智頭往来志戸坂峠越えと宮本武蔵の道鎌坂峠越え    |                            | 山口県                 |
| 49 萩往還                            |                            | 香川県                 |
| 50 四国八十八ヶ所結願直前の山越えの道(87番札所～88番札所) | 銅山越え・馬道(炭の道)跡を含む           | 愛媛県                 |
| 51 別子銅山廃道                         |                            | 高知県                 |
| 52 坂本龍馬脱藩の道                       |                            | 福岡県、佐賀県             |
| 53 肥前・筑前街道 脊振坂越え                  |                            | 福岡県                 |
| 54 英彦山をめぐる道                       | 宝満山・英彦山 修験道トレイル・春、秋の入峰道を含む | 宮崎県、鹿児島県            |
| 55 薩摩街道高岡筋                        |                            | 大分県                 |
| 56 六郷満山峯入りの道                      |                            | 熊本県、宮崎県             |
| 57 椎葉村をめぐる山岳古道                    | 霧立越・向霧立越                   | 宮崎県、鹿児島県            |
| 58 飫肥街道                           |                            | 宮崎県、鹿児島県            |
| 59 首里城を目指す道                       |                            | 沖縄県                 |



## 連載■島の山旅への誘い⑨

## 五島列島

## ―七ツ岳、山王山、番岳、遠見番山、鬼岳など

久保典彦

## 五島列島の山概説

五島列島は長崎から西へ100kmに位置し、中通島、若松島、奈留島、久賀島、福江島の5つの大きな島およびその周辺の小さな島々からなる。海食崖や火山地形、溶岩流跡など変化に富んだ地形が形成されており、五島列島の多くのエリアが西海国立公園に指定されている。そして、島々には多くのカトリック教会が点在し、「長崎

と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として、世界遺産に登録されている。

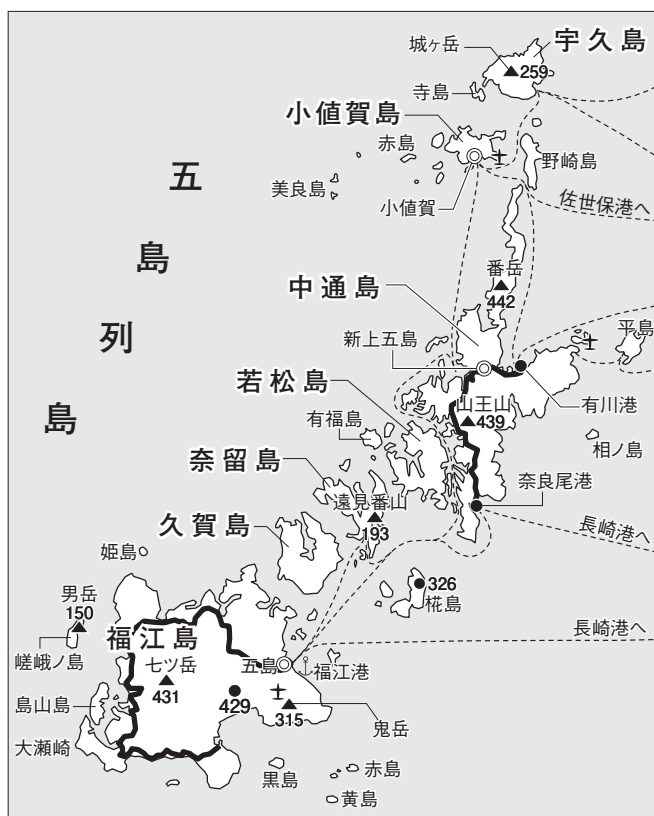
また、近年漁獲高は減少しているものの豊富な漁場があり、漁業が重要な産業である。さらに、世界で最初の洋上石油備蓄基地があり、規模も世界最大級である。

福江島の七ツ岳や五島列島最高峰・父ヶ岳、鬼岳をはじめ、中通島の山王山や番岳、奈留島の遠見番山など標高は低いものの、ヤブツバキなどの常緑樹である照葉樹林が多く、暖かい対馬海流の影響で温暖な気候に恵まれ、アコウ、ヘゴ、リュウビンタイなど亜熱帯性の植物も見ることができ。

登山適期は、春や秋の季節が天気が安定していてお勧め。南から上がってくる対馬暖流の影響で夏は涼しく、冬は暖かいが、冬は海が荒れることがある。五島列島の島々の教会を巡りながら、登山と美味しい海の幸を堪能するプランなどお勧めだろう。



七ツ岳山頂からのパノラミックな展望



## 主な山の登山ガイド

## ▲七ツ岳

七ツ岳(431m)は福江島の西側にある花崗斑岩でできた岩峰で、7つの岩峰が鋸歯状に連なり、やせた尾根歩きが続くガレ場もあるため、標高の割には歩きごたえのある山である。

まずは、福江市内から車で30分ほどの七ツ岳登山口まで進む。途中からの七ツ岳の展望がすばらしい。登山道は九州自然歩道でもある。

り、最初は整備された階段の急登を進むが、やがて緩やかな傾斜になり徐々に高度を上げながら進むと傾斜もきつくなり、少しずつ岩が露出し始める。現われた大岩を三点支持でしっかりとつかみながら乗り越え、眼下には東シナ海や集落の田園風景がすばらしい。ここからやせた尾根歩きが続く。いったん樹林帯に下り、さらに急な岩場を両手を使いながら慎重に登ると、七ツ岳山頂に到着する。

山頂からの眺めは抜群で、標高400m程度の山頂にしては、これまでの行程の厳しさから感動も大きい。その後、やせた尾根を慎重にたどり、いくつかのピークを越え急な尾根の傾斜を下ると、やがて歩きやすい樹林帯に入ると、七嶽神社の奥殿跡を下ると車道に出る。ここからしばらく下ると七嶽神社に到着する。七嶽神社は源平壇ノ浦の合戦に敗れた平家の落ち武者たちを祀った神社である。七嶽神社には駐車スペースがある。さらに車で5分ほど進むと荒川温泉があり、足湯や入浴が可能である(徒歩約4時間)。

#### ▲山王山(三王山、雄岳<sup>おん</sup>)

中通島の山王山(439m)は、遣唐使として海を渡った最澄が開山した由緒ある山である。その歴史的背景から、山王山は日本遺産第17号のうちの一つに認定されている。また、比叡山延暦寺の守護神・山王権現を祀ったと言われている。山麓の集落に山王一ノ宮、八合目上部に二ノ宮、頂上に三ノ宮が鎮座している。

登山口は荒川側と今里側からがあるが、ここでは歩行時間が短く、登山者も多い荒川側を紹介する。

荒川登山口は八合目まで林道が整備されており、実際登り始めるのは八合目からである。まず車道脇から登山道に入り、緩やかに樹林帯を進む。このあたりは鳥獣特別保護区にも指定されており、登山の途中ではシカやイノシシ、様々な野鳥に出会う可能性がある。登り口から30分ほど行くと、山王二ノ宮が祀られている。さらに進み、やや傾斜がきつい箇所を登り切ると広いスペースがある山王三ノ宮に到着する。さらに1分ほど上がると山王山山頂に到着する。

なお、山頂展望台は、以前の台風の影響で木製の階段が崩壊しており、上部へは通行禁止となっている(徒歩約2時間)。

#### ▲番岳<sup>ばん</sup>

番岳(443m)は中通島の最高峰。その名のとおり、昔は外敵から身を守るため見張台があった場所である。山頂近くに駐車スペースがあり、コンクリートの階段を登れば、あつという間に到着する。頂上には円型のベンチがあり、ゆったり休憩しながら展望を楽しめる。山頂から南へ10分ほど進むと展望台があり、この周辺には4月下旬ごろ、たくさんのヤマツジ



照葉樹林をかき分け七ツ岳のやせ尾根を行く

が咲き誇る(徒歩約10分)。

#### ▲遠見番山<sup>とみばん</sup>

奈留島にある遠見番山(193m)も、中通島の番岳同様に見張り台の役目を果たした山で、島は遣唐使も寄港したと言われ、海上航路の重要な拠点の一つであった。

その奈留島のフェリー・ターミナルからタクシーに乗りし15分ほど行くと、汐池峠の登山口に到着する。ここから水晶岳を経由して遠見番山に登頂し、西側の登山口に下山する縦走コースがお勧めである。登山道に入ると展望の利かない樹林帯を緩やかに登っていく。このあたりはイノシシの出没が多く、ときおりそのうめき声が聞こえることもある。30分ほど歩くと、水晶岳山頂に到着する。貴重な双子水晶(日本式双晶)の産地だが、採取は禁止である。さらに進むと、烽火台跡のある遠見番山に到着する。山頂からは五島灘など、素晴らしい展望が広がる(徒歩約1時間)。

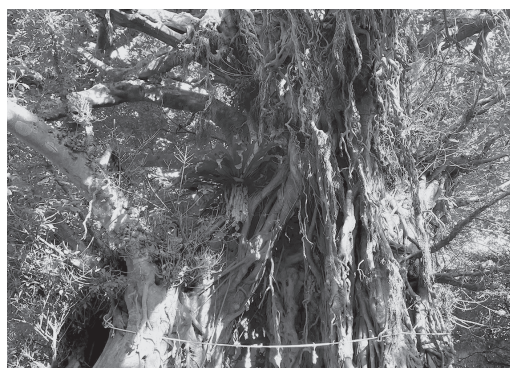
#### ▲鬼岳

福江島にある火山地形の山で、鬼岳(315m)火山群とも言われる。およそ500万年前に噴火した楯状火山の上に、5万年前の臼状火山が重なり合っただけのもので、シンダーコンと呼ばれる。鬼岳、火ノ岳、城岳、箕岳、白岳の5つの火山で形成されている。



山王山八合目付近にある山王二ノ宮





中通島にある見事なアコウの大木

登山口から山頂までわずか30分ほどで到達でき、ほぼ全面が芝生に覆われており、海上や上空からでもひと目で分かる、シンボリックな山である。眼下には福江の街並みや美しい海岸など、360度の展望が広がる(徒歩45分)。

### ▲城ヶ岳

城ヶ岳(259m)は五島列島最北端に位置し、行政区分では佐世保市に属する宇久島にある最高峰である。別名「五島富士」とも言われ、山頂からは天気が良ければ北に杓岐や対馬、南に上五島の島々を望むことができる。太平洋戦争時には、佐世保軍港の門戸としての役割も果たしていた場所である。



歩きやすい芝生の道を鬼岳山頂へ

登山は頂上近くまで車道があり、駐車場もあるので、山頂まで5分ほどで到達できる。健脚の方は下部の妙見神社から登ることもできる(徒歩5分)。

### ▲男岳

嵯峨ノ島は北の男岳(150m)と南の女岳が接合してできた島で、周囲約13kmあり、島全体が溶岩と凝灰岩で形成されている。島を一周する遊歩道も整備されている。男岳へは港から歩き始め、東から回り込んで山頂に到着し、下山は西の方から千畳敷方面へ下る一周コースをたどる。山頂からは、福江島や美しい千畳敷が展望できる(徒歩約3時間)。

## 山旅のメモ

五島列島へのアクセスは、空路は福岡空港と長崎空港から五島福江空港へのフライトが毎日ある。海路は主な航路である長崎港から中通島の3つの港と福江島への高速船とカーフェリーが運航している。奈留島へもカーフェリーが運航している。博多港から大型カーフェリーが宇久島、小値賀島、中通島、奈留島、福江島を横断する。佐世保港からは、高速船が宇久島、小値賀島、中通島への高速船とフェリーが運航している。

ただし、新型コロナウイルス感染症の影響による減便、運休が発生しているため、事前の情報確認が必要である。島と島との移動は定期船が運航しているが、本数が少ないため、ある程度人数がいれば予約制の海上タクシーを利用することも可能である。

五島列島における登山に関しては、登山口までのアクセスが定期バスなどほとんどない地域ばかりなので、タクシー利用がお勧めである。なお、効率良く回るには登山ツアーを利用するのも便利である。任意団体の「五島市ふるとガ

イドの会」(TEL 0959-88-9075)が、現地観光情報や登山情報を持っていてるので、情報収集してみると良いだろう。

宿泊に関しては、福江島や中通島は多くの宿泊施設があるが、その他の島には民宿が数軒しかなく、新型コロナウイルスの影響で休業している所もある。

なお、せっかく五島列島を訪れたなら、世界遺産の教会群もぜひ見学していただきたい。特に奈留島の江上天主堂や中通島の頭ヶ島天主堂などは必見である。頭ヶ島天主堂は、250年にも及ぶキリシタン禁教令下の弾圧に耐え、再び島へ移り住んだ信者たちが、近隣から切り出された砂岩を積み上げて造った、全国でも珍しい石造りの教会堂である。外観の重厚さとは異なり、内部は折り上げ天井に花柄をあしらひ、優しい雰囲気を出している。

また、現地の観光ツアーで訪れることができる、海上から見るキリシタン洞窟などもお勧めである。海の幸も新鮮でとても美味しく、名物のツバキ油を練り込んだ五島うどんなどもぜひ味わってほしい。(アルパインツアーサービス株)



# 東 西 南 北

## 2つの二俣小屋

牛丸工

北アルプス常念岳付近には、かつて2つの二俣小屋が存在していたことをつい最近知った。1つは二俣小屋、もう1つは二ノ股小屋。似たような名前で、しかも近場にあるので、頭の中でこんがらかっていたが、およそ理解できた。

東天井岳の大天井岳寄り稜線に現在でも小屋の石垣の基礎部分跡が残されている二俣小屋があった。いつから存在していたか不明であるが、いわゆる山小屋ではなく猟師小屋の扱いであったようであるが、なんと日本山岳会発行『山岳』

十三年1号に小屋の屋根が映っている写真が掲載されていたのだ。発行日が大正7年12月10日なので、それ以前の撮影であり、撮影以前には存在していたことになり、そ

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

の経緯は今のところ不明である。英文ページの24ページ目に5枚の写真があり、その中に「5、Hodakayama from Ninomata-no-koya」として屋根越しに奥穂高岳と前穂高岳の吊尾根がくつきり遠望できる。撮影者は不明で、「From the collection of Mr. S. Kanai」とあるので金井（人物像不明）所有の写真のようである。屋根だけ見ると粗末な猟師小屋というより、立派な山小屋の屋根のように見える。

もう1つは、常念岳と蝶ヶ岳の稜線から西側に下り、梓川に出て二ノ俣川と梓川の合流付近にあった二ノ股小屋である。三郷村庄屋務台家の「槍ヶ岳道法」を含む務台家文書「公私年々雑事記」によると、宗教登山ではない民間人として最初の槍ヶ岳登頂者ということになる三郷野沢村庄屋・務台与一右衛門景邦は、ほか1人との2人で、天

保6年7月1日（西暦1835年7月26日）、槍ヶ岳に登らんと、朝、三郷村の家を出発し、二ノ股小屋でその日の夜泊まろうとしていると、播隆の槍ヶ岳登山案内人の中田又重が、美濃国伊尾（揖斐）の4人を引き連れ、槍ヶ岳参詣で下山してきて一緒に泊まった。務台の登山行程をたどると、三郷村（鍋冠山）上高地と槍ヶ岳の分岐点（手水ヶ嶽）蝶ヶ岳中程（熊倉沢）梓川（二ノ股小屋）槍沢（槍ヶ岳）ということになる。鍋冠山から蝶ヶ岳へ向かい、蝶ヶ岳を越さずに途中で梓川の方向へ下っている。蝶ヶ岳方面から槍ヶ岳に登る際、稜線上を歩かず、一度梓川まで下りてから、槍沢を上り詰めて槍ヶ岳に登っている。常念岳や東大天井岳は通過せず、東大天井岳の大天井岳寄りにある二俣小屋とは明らかに異なっていることが理解できる。

二ノ俣と二ノ俣とは常念岳付近の西側にある沢で、いずれも梓川に合流している。一ノ俣と梓川の合流地点には、かつて山田利一が大正14年に建設した一之俣小屋が存在したが、昭和19年焼失し、その地では再建せず、横尾山荘とし

て場所を変えて昭和21年に建て替えている。沢が2つあり、1つの沢の呼称が二ノ俣と二ノ股と2種類の表記があり、また、同じような名称の山小屋がこの付近にいくつもあり、頭の中の交通整理に難儀する。

## 山岳画展を街とリゾート 地で楽しむ ―日本山岳画 協会創立85周年展など―

小原茂延

日本山岳画協会は1936（昭和11）年1月に中村清太郎、足立源一郎ら十数名の画家によつて創立され、顧問に小島烏水、藤本九三が名を連ねた。その創立は「会報」第55号（昭和11年3月）に中村清太郎が「日本山岳画協会の創立に就いて」として発表している。その声明の後段で「……日本山岳会とは一面正に同胞の會と申すべきものであり、同会員諸賢の親愛を希ふ次第であります。……」と述べ、その関係は今日に続いている。

私は生来、絵画の鑑賞が好きで山岳会入会以来、有楽町の交通会館や大町山岳博物館などで会員画

伯の力作を見る機会が多い。今年は創立85周年に当たるが、昨年には記念画文集の発行もあり、26名の秀作と文章が紹介されている。交通会館ゴールドサロンに平日の混まないころを見計らって出掛けた。それぞれの作品には画家の個性が光り、その特徴を確認しながら見ていくと、なんと「遺作」が2点もあつて吃驚した。若林晴男画伯「田代池の印象」と増田欣子画伯「屏風の頭からの槍ヶ岳」である。画家の方々も山岳会同様に高齢化が進んでいるようで、お二方も80代後半であつた。一方で会の新人と思われる画家数人の出品もあり、それと分かつた。また、久々に最年長の熊谷樞画伯の作品もあつて嬉しかった。

立会いの画家数人の中に武井清前代表幹事もおられたが、来館者と話されていたので後でご挨拶と思ひ、鑑賞に集中し写真にも収めている間に外出されたようであつた。武井画伯は今年卒寿を迎えられるようだが、豊饒として、葦崎のアトリエからしばしば東京に戻らているようだ。

また、某日、梅雨の晴れ間の暑い日に河口湖美術館を訪ねた。定

礎は平成2年で河口湖畔のすばらしいロケーションの中にあつて、御坂黒岳や三ツ峠方面などを望む地にある。7月〜9月にかけて「足立源一郎展」が開催されているのを知り、急遽行くことを思い立つた。館長を長く務められたのが足立源一郎画伯の子息である足立朗さんで、本会の資料映像委員会が主催している「全国山岳博物館等連絡会議」などでお世話になったと聞いている。今の館長は渡辺吉高さんで、本会所蔵の茨木猪之吉作「富士山麓」を引き続き寄託願っている。

今回の展示作品は40点ほどで、場所柄富士山の絵が半数近くを占めていたが、槍・穂高および剣、白馬三山などの日本アルプスの高峰が迫力ある筆致で描かれた作品も多く、コロナ禍の平日でもあつたので会場はやや閑散としていたのがなんと惜しい気がしてならなかつた。出品中に山野草を描いたものがあつて、五百城文哉の描く精細な高山植物図といったものはまた違った味がある。藤木九三の肖像画なども描いた画伯であるが、渡仏して学んだ経験も有し、その画才を発揮して山岳風景画の巨

匠として現場主義を貫き、その集

大成を図った画業に思いを馳せた。

## 支部



## だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

### 北九州支部 英彦山清掃登山

英彦山の今年の山開きは、コロナ禍のため4月末には中止が決まっていた。山開き前の清掃登山は一連の行事で、北九州支部では恒例となっている。その月例行事が5月になり、緊急事態宣言により個人山行に切り替えられた。これにより参加者は8人での実施となった。5月23日(日)、別所駐車場に9時に集合。日向支部長の英彦山の植林への取り組みや、これからの登山のあり方についてのお話を聞き、9時7分にスタート。

近くの森では小鳥たちが閑静に棲む所を多くの車や人の声に驚き「うるさい！」と高鳴っているのか、それとも久しぶりの梅雨の晴れ間で心地よく高鳴っているのか、鳥

たちの鳴き声が響き渡っていた。私たちのゴミ袋とトングを持った姿を見て、店の主人が出てきて笑顔で声を掛けてくれた。定例のトイレ掃除を行なったときにも会話を交わしていたと後で分かつた。20分ほどで奉幣殿に着き、いつものように参拝を済ませて入山した。これより表参道コースを左右に目を配り、時間を掛けてゴミを拾いながら登っていった。久しぶりの山行で話も弾む。目指していた行者堂(産霊神社)は帰りに寄ることにして中岳(1188m)へ向かい、11時30分ごろに着いた。

英彦山はいつもの人出ではあるが、単独か2〜3人のグループが目立った。日差しは汗ばむほど強く、木陰を探してそれぞれ静かに昼食を済ませた。以前に作業をした南側斜面を見て草木がすっかり

と育ち、きれいになつてゐる状態を見て満足感を覚えた。今回は北側斜面のゴミを拾った。投げ捨ての時代に、下までゴミを持って帰る辛さを知つてか、地面を掘つて埋めている。1ヶ所でゴミ袋がいっぱいになる所もあつて、ゴミ拾いと言うより怒りを込めてのゴミ取りと言つた方が当たつてゐる。

50分ほどでゴミを1ヶ所に集め、より分けてから次の産霊神社へ下つた。13時10分着。来るときに集めたゴミを置いていたので詰め替えをした。各自が持つて帰る量に達していたので、ここでは清掃作業はほどほどにして切り上げた。各自がザックに詰めたり、紐で結び付けたりして下山の途についた。

下山はいつものボツカコースで2回休憩を取り、別所駐車場には14時32分に無事下山した。ゴミ置き場で8個の袋を前に記念撮影をした。自粛ムードの中で体には応えたが、英彦山への想いとボランティアの爽快な気分が勝つてゐるいつもの清掃登山だった。解散時に竹本副支部長が「年1回からもう1回増やして続けていきたい」とのお話があつたが、参加者全員がうなずいた。

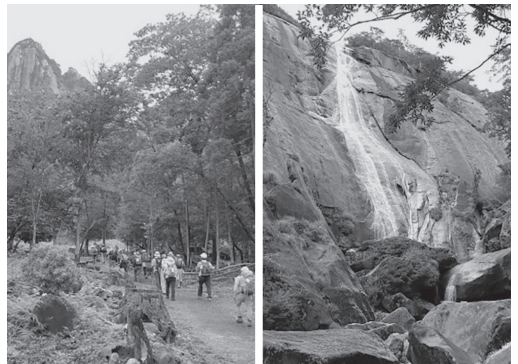
計画どおり15時に家路についた。皆様お疲れ様でした。小鳥たちのさえずりが心地よく響く一日だった。  
(清家幸三)

### 宮崎支部

### 鉾岳トレッキング

7月の定例山行は宮崎県延岡市の北方エリアのトレッキング。ここ北方エリアには鹿川溪谷、鬼の目山、比叡山、鹿川キャンプ場、ETOランド連日の峰などがあり、お子さんから中高年の私たちまで、皆が自然に触れ合いアスレチックな体験ができる大変魅力のあるエリアである。

7月11日(日)、早朝に集合した宮崎市内メンバーと日向市内のメンバーが8時40分によつちみる屋で合流。ここから鹿川溪谷へ向かう道中には、自然の造形美を誇る矢筈岳の展望が開ける。道幅はやや狭く、離合が数回必要となり狭いトンネルも通過。最後のトイレ休憩(10時)は鹿川溪谷駐車場で、平田さんよりメンバー紹介と本日の行程説明があつた。バックン岩近くに咲くツチビノキを愛で、ヒメシヤラ林を抜けて鉾岳・おんぼこ



左)登山口付近から見た鉾ヶ岳 右)花崗岩のスラブと滝

山頂(1277m)へ、高低差550mの道のりを進む。10時30分、登山口を過ぎるとほどなくして目を引くタケニグサの群生地だ。その奥に鉾岳がそびえる。ここ北方は千支の町でもあり、道中あちこちにかわいい木彫りのオブジェ、足元にはキラソウ、コナスビ、キノコを見掛け、そのたびに撮影隊の足が止まる。その間も平田、竹田のお二方が道を整備しつつ誘導してくださり、メンバーは自然の息吹を感じながら安心して進む。

ヒメシヤラのつるつるとした幹はなんとも涼しげで、たわなに咲き誇った白くかわいらしい花が地面を覆うように落ちていて癒される。



前日からの雷雨で木の根や岩は滑りやすくなる場所もあったが、転倒者もなく体調に合わせながら休憩して水分、塩分を補給する。ほどなく花崗岩でできた一枚岩のスラブを望むことができる。高さは350mにも達し、全国的にも最大級と言われる鉾岳の姿は息をのむ。溪谷のせせらぎとシャーシャーと鳴くセミの声に夏を感じながら登ってきた先には、岩肌を這うようにスローモーションで流れ落ちてくる滝の姿がある。美し過ぎてため息。本日の一番の景観である。鉾岳と白滝が見られる巨石周辺ではヤマアジサイ、リョウブ、ヤマボウシ、ヤマジノホトトギスなどの花を愛することもできた。12時30分、目的のバックン岩滝つぼでは、周辺に咲くツチビノキが見ごろを迎え、世界でここにしか咲かない花との出会いが心とませ、メンバーを癒してくれた。

前日に、雷雨の影響はないか下

## 「会員優待サービス」変更のお知らせ

（会員サービスWG）

＊【八ヶ岳・霧ヶ峰】奥霧ヶ峰・八島高原荘／廃業のため削除

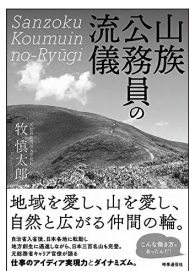
流の川の濁りを確認してくださった平田さんのお陰で決行が決まり、安心してトレッキングに臨めた。巨石でのハシゴとロープは、全員無事通過できるか緊張する場面も平田さんのサポートもあってスムーズにクリアできた。バックン岩への足場補助ロープ設置など準備、計画と大変お疲れ様。全行程約



## 図書紹介

牧愼太郎著

### 山族公務員の流儀



2021年6月  
時事通信出版局  
四六判 216頁  
1700円＋税

本書は、書籍の分類では「行政・自治体・公務員」に分類され、「一見すると「山」とは無関係であるように思えるかもしれない。確かに、内容の大部分は、著者の公務員人生

3・5km、約5時間のうち休憩時間2時間、高度差412m。16名の参加者の中で1組2名が途中下山した。後で合流はできたが、GPSアプリ利用など遭難や事故に対する備えも今後の課題となった。

（風間恭子）

の中で見てきたこと、経験してきたことなどの体験談やエピソードが赴任地ごとに書かれており、直接「山」のことに触れている箇所は少ない。しかし、著者にとつて、「仕事」と「山」とは切っても切り離せない関係であり、山好きであったからこそ思い付いたアイディアが政策に活かされて、成功した例や各赴任地で出会った山仲間との思い出、さらには双子のお嬢さんが、幼いころによく登った山が紹介されているなど、「あのととき、

あそこにおいて、こんな山に登っていたな」という登山者としての「自伝史」が、そのときの仕事の状況とともに散りばめられている。

最初のページは、若いころの赴任地である福岡県北九州市でのエピソードであり、ここで紹介されている政策は、登山愛好家に大きな恩恵を今ももたらしていると言えよう。その恩恵は、温泉採掘事業の成功だ。北九州市は、政令指定都市の一つで都会のイメージが強いが、登山の対象となる山も多い。これ以外にも、北九州市勤務時代のエピソードの中に登場する皿倉山（622m）は、同市八幡東区にある夜景の名所で、山上には、放送局などの送信塔群が立っている。ケーブルカーが架けられていて、気軽に山頂に立てる山であるとともに、ここから九州自然歩道として整備されている登山道が尺岳、福智山、牛斬山へと延びており（完歩すると丸1日掛かりのロングコース）、登山の拠点でもある。このようなバリエーションに富んだ皿倉山ではあるが、当時、登山の帰りに温泉に入って帰宅するという趣向の方には、残念ながら近くに天然温泉がないため、

それが叶わなかったという。

そのようななかで、天然温泉があれば良いのに、という夢を民間を巻き込んで、8年越しで実現させた事例が紹介されている。もちろん、成功談ばかりではない。同じ皿倉山が舞台となった事例で、世界一の高さのタワー（現在の東京スカイツリーと同じ634m）を八幡にあるテーマパーク「スペースワールド」（現在は閉園）の隣に誘致し、皿倉山にある通信塔群をそこに移設させようという目論見が頓挫してしまったという事例も紹介されているからだ。

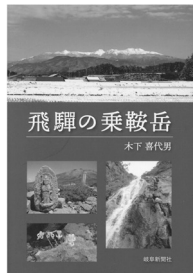
地元民との努力による登山道整備の成功談もいくつか紹介されている。一例を挙げると、島根県の総務部に3年間勤務されていたころの記事で、市町村職員や町づくり関係者など、地元の方とともに山に登り、大いに交流を深めておられたことだ。地元の方の尽力で登山道が整備されて、小学校の遠足などで子どもたちが地元の山に登っている地域は元気があったそうだ。また、北海道総務部に勤務されていた時代に、メーリングリストの仲間とともに登山道を整備した事例も紹介されている。この

ような生の体験談は、登山愛好家としては大変興味深い。

また、これとは対照的な事例として、北海道総合企画部に勤務されていたところに全国初の「知事認定アウトドア資格制度」を制定して、北海道の自然の良さも危険も知るガイドを行政サイドで認定し、北海道の山に送り込んだという事例も紹介されている。このように著者が赴任された土地ごとに様々な異なる形で「山」と関わり、多視点から「山」を捉えてきたことが窺える一冊である。（床田真理）

## 飛驒の乗鞍岳

木下喜代男著



2021年3月  
岐阜新聞社  
A5判 323頁  
2000円＋税

著者は歴史ある飛驒山岳会の会員で、長年にわたって北アルプスで登攀を続け、チベットの6000m峰初登頂記録もお持ちであるが、年齢とともに徐々にふるさとのおよかな山、乗鞍岳への関心が高まり、その登山の歴史や文化

などを書き留めておこうと思ったとのことである。

乗鞍岳はスカイライン利用で手軽に登れる3000m峰。登山の対象というよりも観光地・スキー場として認識している人が多いかもしれない。実は知られざる魅力に満ちている。本書は乗鞍岳を丸ごと紹介する、地元の人への愛情が詰まった一冊である。

第一章「乗鞍岳は自然の宝宝箱」では、その成り立ち、動植物などとともに「美しい滝が多い山」の項を設け、自ら沢を遡行した記録に多くのページを割いている。第二章「乗鞍岳登拝路の盛衰」では古くからの信仰の道を紹介し、ここでも自ら歩いた記録を載せている。第三章「乗鞍岳の歴史」は前章と重複する部分もあるが、近代登山の歴史が語られている。飛驒山岳会は日本山岳会創立の4年後に、国内で2番目の山岳会として設立された。ルート開拓・山小屋建設など乗鞍岳の変遷において、この会を抜きに語ることはできない。早くからスキー登山も実践しており、第四章「乗鞍岳にあった幻の山岳スキー場」、第五章「乗鞍岳の山スキールート」で、その歴史を紹介

し、ここでも自ら山スキールート滑った記録を紹介している。

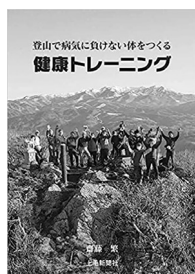
第六章「乗鞍岳での不思議な話」、第七章「乗鞍岳を愛した歌人・俳人たち」、第八章「多くの校歌に歌われ、親しまれている乗鞍岳」と続く構成であるが、俳句も嗜む著者らしく、第七章では乗鞍岳を詠った和歌・俳句の紹介とともに、山岳俳人「前田普羅の研究」に力点が置かれている。

「木曾の御嶽」「加賀の白山」と表現する。同様に「飛驒の乗鞍岳」という言い方がふさわしいと言う。深田久弥は『日本百名山』の中で乗鞍岳について「昔の登拝者は多くは飛驒側からであった。この山を詠んだ多くの詩歌の類が飛驒側にあることを見ても、昔は乗鞍は飛驒の山であった。（原文のまま）」と書き、山頂からの重畳たる山を眺めて、最後に「ここにして飛驒こそ真の山の国という感が深かった。」と締めくくっている。久弥が朝な夕なに白山を眺めて抱いたと同じ想いを、著者は乗鞍岳に感じてきたのであろう。車に頼らない登山の対象として見直すことができる著書であり、乗鞍岳の様々な魅力を知ることができるで

あろう。

(荒井正人)

齋藤繁著

登山で病気に負けない体をつくる  
健康トレーニング2021年4月  
上毛新聞社  
A5判 248頁  
1500円+税

本書は、2017年7月に発売された『登山を楽しむための健康

トレーニング』の続編だ。著者はもちろんも本会元理事で、群馬大学医学部附属病院長の齋藤繁会員（群馬支部）である。

群馬支部では、地元自治体や大学、新聞社の共催を得て、18年から「健康登山塾」を開催している。地元の山を歩きながら健康増進を図ろう、山登りの実力アップを図ろうという趣旨で始められたものだが、右記の17年版がテキストとして使用されている（会報「山」19年1月号、および『山岳』第百十四

年（2019年）参照）。

17年版は、「医学的な見地から山登りの体への影響を考え、真の健康増進山登りはどんなスタイルか、地元群馬の山々を例として考えたいと思います。」（はじめに）より）と述べているように、総論として「健康増進のための登山」を解説し、各論として「ぐんまの健康登山コース」を県内山域別に紹介している。

一方、21年版では、「私たちは新型コロナウイルスの影響で、日常生活における健康がいかに大切であるかに改めて気付かされました。

登山は楽しみながら健康増進を図ることができ、しかも一生楽しめるスポーツです。続編でも健康維持・増進が図れる適度な登山コースをたくさん紹介しています。」（お読みになる前に）より）とあるように、群馬県内の登山コースを自分の健康状態に合わせて選択できるよう、各山のコース別にアドバイスされている。

総論とも言える「山登りの健康増進法」では、Ⅰ健康増進につながる登山、Ⅱ「健康登山塾」とはどのようなものか、Ⅲ「健康登山塾」の成果、Ⅳ感染症やケガに負けない

体をつくる、Ⅴ山に出かける前の基本的な筋力トレーニングの5項目について解説されており、「健康登山塾」から得られたものや感染症対策など、最新の知見が反映されている。

実践編となる「ぐんまの健康登山増補コース」では「お手軽」「パワースポット」「信仰と歴史」「里山と森林浴」「高山散策」などをキヤッチにコース分けし、17年版にプラスして赤城山麓・橘山から上州武尊山まで、60コースが紹介されている。

群馬県内の山々は、県内はもとより首都圏の登山者にとっても親しみのあるフィールドである。正統編を参考に、自分の体力や健康状態に見合った山歩きを存分に楽しみたいものである。コロナ禍により人々がライフスタイルの見直しを迫られているが、キーワードは「歩く」ではなかるうかと考える。第5次登山ブーム到来か……。

(節田重節)



## 年次晩餐会中止のお知らせ

日本山岳会会員 各位

大変残念なお知らせになります。本年の晩餐会開催の是非につき理事会にて協議を重ねましたが、今年も中止とさせていただきます。新型コロナウイルス感染拡大がその理由であり、現状では安全に開催できないためです。2年連続で中止せざるを得ないことは、誠に残念でなりません。

全国の会員の皆さんが一堂に会して講演をお聴きになり、晩餐会で交流を楽しむ場の代わりにはなりません。12月

上旬に「晩餐会ウィーク」と称して、ウェブナー(ウェブによるセミナー)を開催したいと考えております。

「晩餐会ウィーク」については改めてご連絡いたしますが、「こんな人の話が聞きたい」「こんなテーマの話が聞きたい」などのアイデアやリクエストがありましたら、「晩餐会ウィークについて」という件名にて、事務局宛にお便りをお寄せください(jimukyoku@jac.or.jp)。

日本山岳会会長 古野 淳

総務委員会



# 会務報告

■8月の理事会は夏休みのため休会でした

## ルーム日誌 8月

20日 会報編集委員会

8月来室者 14名

会員異動  
物故

辻 和毅(7698) 21・7・28

I N F  
O R M

### インフォメーション

A T I  
O N

◆日帰りアルプス・シリーズ第2回 都留アルプス山行のご案内

山行委員会

都留市街に沿って全長8km、標高600m前後の山々を連ねた都

箕浦靖夫(8073) 21・8・24  
八木昭二(9986) 21・8・10  
北島英明(15942) 20・12・31

### 退会

武田健二(14361) 広島  
圓谷伸希(16207) 東海  
脇海道卓(16282) 東海  
藤野宣知(16409)  
鶴田千恵(A0343) 神奈川  
鶴田愛美(A0344) 神奈川

留アルプスの縦走路を歩きます。

日程 11月6日(土)

集合 富士急行・都留市駅 改札

9時30分

行程 都留市駅―谷村発電所―展

望台―烽火台跡―白木山(625m)―長安寺山(654m)―水道橋「ビーヤ」―天神山(580m)―友愛の森―古城山(583m)―住吉神社―東桂駅

歩行 5時間30分

装備 一般登山装備

解散 東桂駅16時予定

費用 900円(傷害保険料、通信費など) 当日集金 集合場所、解散場所までの往復交通費は含みません。

定員 10名

申込み 10月24日までに

☒ sanko@jac.or.jp 山行委員 杉崎敬子宛。傷害保険加入のため、氏名、性別、生年月日をお知らせ下さい。

また、参加者名簿作成のため、会員番号、住所、電話番号、携帯、緊急連絡先電話番号などをお知らせください。

問合せ先 山行委員会 杉崎敬子  
☒ sanko@jac.or.jp  
TEL 090-11996-4110

◆国分寺で「山\*フェスタ」開催

国分寺市民祭りで、東京多摩支部

部の活動をパネル展示などで紹介します。会員の方は、日本山岳会に興味のある方やお仲間をお誘いしてご来場し、ティースペースでお寛ぎください。登山を始めた方、山仲間が欲しい方、自分の山を進化させたい方、自然保護に興味のある方などお立ち寄りください。相談コーナーもあります。

日時 10月24日(日)10時～16時30分

場所 国分寺市立 cecobunji プラザ セミナールーム(JR 国分寺駅北口WESTビル5階)

問合せ 小澤

☒ soumu.tama.yama@gmail.com  
TEL 080-37211403

◆京都・滋賀支部講演会「野生の山へ北海道の山・奥美濃の山」のお知らせ

日時 10月16日(土) 13時15分～17時(13時開場)

場所 同志社大学新島会館大ホール 京都市上京区寺町通丸太町上ル(京都御所東)

\*会場には駐車場がありません。車の場合は近くの有料駐車場をご利用ください。

内容 ①米山悟氏 演題「北海

## 寄附金および助成金などの受入報告 (6月30日まで)

| 寄附者など            | 受入金額など<br>(単位千円) | 寄附の目的、そのほか         |
|------------------|------------------|--------------------|
| 三井住友信託銀行         | 200              | 高尾の森づくりの会活動への指定寄附金 |
| グローリーエンジニアリング(株) | 50               | 高尾の森づくりの会活動への指定寄附金 |
| 高尾登山鉄道(株)        | 150              | 高尾の森づくりの会活動への指定寄附金 |
| アサヒビール(株)        | 100              | 高尾の森づくりの会活動への指定寄附金 |
| 伊藤ハム(株)          | 50               | 高尾の森づくりの会活動への指定寄附金 |
| コニカミノルタ(株)       | 200              | 高尾の森づくりの会活動への指定寄附金 |
| 電源開発(株)          | 100              | 高尾の森づくりの会活動への指定寄附金 |
| 富士電機(株)          | 50               | 高尾の森づくりの会活動への指定寄附金 |
| エリオニクス(株)        | 100              | 高尾の森づくりの会活動への指定寄附金 |
| 金子 浩 会員          | 100              | 新永年会員寄附            |
| 新妻 徹 会員          | 50               | 山岳環境保全事業寄附金        |
| 平井 拓雄 会員         | 20               | 山研運営資金寄附金          |
| 小林 清勝 会員         | 5                | 高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金      |
| 服部 尚 会員          | 10               | 高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金      |
| 平野 彰 会員          | 5                | 高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金      |
| 松尾 知弘 会員         | 5                | 高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金      |
| 佐藤 博 会員          | 10               | 高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金      |
| 木戸七七子 様          | 10               | 高頭仁兵衛翁寿像碑修復募金      |

\*7,8,9月分の寄附金および助成金などの受入報告は、10月号に掲載させていただきます。

道式の山の登り方 北の山への誘い(北の山のイグール技術考察)北海道大山岳部OB、NHKの山岳カメラマン。

### ②清水克宏氏

演題Ⅱ「京都岳人が拓いた奥美濃の道なき山の今(『森の国水の国 岐阜百秀山』出版にあたって)」日本山岳会東海支部技術向上委員長、大垣山岳協会常任理事。申込みおよび問合せ先 日本山岳会京都・滋賀支部事務局 〒639-1054 奈良

### ◆中村好至恵「山の絵」展@hinoharu-alp the 6th

会期 10月1日(金)～31日(日)  
会場 日野春アルプ美術館 〒408-0025 山梨県北杜市長坂町長坂下条134-2 TEL 0551-3216325 休館日は原則、火・水ですがお問合せください。作者在館予定は金・

県大和郡山市新町534-5 伊原哲士宛  
✉iharajac@gmail.com  
自宅0743-54-6685

土・日 アルプ携帯090-5194-6989  
入場料 500円(坂本直行などの常設展もある)「山の絵」HP: <http://yamano-jimdo.com> 中村好至恵 yamae33@icloud.com

### 訂正

会報8月号1ページ2段目「記念イベントなど10の案内を記し」とありますが、「10」の文字は不要でした。訂正させていただきます。にも、お詫び申し上げます。

《会報編集委員会》

### ◆編集後記◆

●今月号の連載「島の山旅への誘い」は五島列島ですが、私は福江島だけ、本会会員の故美坂哲男さん(4937)と駆け足で訪れたことがあります。雑誌やテレビに登場し「温泉おじさん」として親しまれた美坂さんの『諸国いで湯案内』⑦九州編の取材で、写真撮影も兼ねて同行したものです。

●最初に杵岐に渡って湯ノ本温泉を、続いて五島の福江島に移動して荒川温泉と曽根温泉を取材するという、「はしご酒」ならぬ「はしご湯」の旅でした。杵岐の最高峰(といっても213m)の岳ノ辻には上がりましたが、五島の山は全く眺めただけ。次回は美坂さんの好物「温泉・ビール」とともに五島の山々と世界遺産を巡ってみようと考えています。(節田重節)

### 日本山岳会会報 山 916号

2021年(令和3年)9月20日発行  
発行所 公益社団法人日本山岳会  
〒102-0081  
東京都千代田区四番町5-4  
サンビューハイイツ四番町  
TEL 東京(03)3261-4433  
FAX 東京(03)3261-4441  
発行者 日本山岳会会長 古野 淳  
編集人 節田重節  
Eメール: [jac-kaiho@jac.or.jp](mailto:jac-kaiho@jac.or.jp)  
印刷 株式会社 双陽社